ヨミダス歴史館 読売新聞 2019年11月30日 朝刊 02 ページ

国家背負った「生涯一書生」

特別編集委員 橋本五郎

中曽根元首相死去

<本文記事1面>

評伝 まさに「巨星墜つ」の感慨を禁じ得ない。政治の世界に身を置く者にとって導きの星であり、政治とは何かを考えるにあたって、中曽根さんの思想と行動は大事な指針だった。今から16年前、中曽根さんが政界引退を強いられた際、私は次のように書いた。

戦後を代表する首相を3人挙げろと言われれば、躊躇なく吉田茂、佐藤栄作、中曽根康弘と書く。順序を付けよと求められれば、迷いなく中曽根、吉田、佐藤と答える。

吉田の背後にはマッカーサー（連合国軍最高司令官）という「至高の権力者」がいた。佐藤には高度成長という「時の味方」があった。しかし、中曽根にはそうした後ろ盾は何もなかった。「田中派支配」と呼ばれる田中角栄の圧倒的な影響力に抗しながら政治を進めなければならなかった。

この見方は今もまったく変わらない。「戦後政治の総決算」を旗印に国鉄など3公社改革に取り組み、最悪だった日米、日韓関係を劇的に改善した。その背後には常に国家があった。しかし、偏狭なナショナリストではなく、「国際主義者」でもあった。

選挙遊説中に東京に戻り、全生庵で座禅を組む中曽根首相（1986年6月撮影、肩書は当時）

中曽根政治の特徴とは何だろうか。第一に権力を最大限に行使しながら「権力の魔性」も自覚していたことである。「権力は決して至上ではありません。政治権力は本来、文化に奉仕するものです。文化創造のためのザーバント（奉仕者）なのです」と『自省録』に書いている。

5年弱の総理在任中、毎週日曜日の晩、東京・谷中の全生庵で座禅することを常とし、その数は167回に上った。政治家とは「歴史という名の法廷で裁かれる被告」と自覚し、反省する機会でもあったのだろう。

第二は人脈を大切にしたことである。昭和20年代末から毎年、手帳の最後のページに「結縁・草縁・随縁」（縁を結んだら、その縁を尊び、その縁に随う）と書いてきたという。中曽根さんの周りには、地元の支持者、政治家、マスコミ、学者などさまざまな輪が幾重にもあった。

第三は事を成すにあたって大きな戦略を描き、周到な準備を重ねたことである。1983年1月の電撃的訪韓と来国訪問などその典型である。国鉄民営化を断行するため反対する総裁以下の首を切ったのも同様である。

97歳の時に一句したためた色紙を頂いた。「理れ火は赫く呀えたる　ままにして」とあった。昨年5月に100歳となり、親しい人たちに内祝いの品を贈られた。その手紙には、「縁と天運の導きに感謝しながら、命尽きるまでお国の為に力を尽くす所存です」と書かれた。

強烈なまでの使命感の背後には、絶えざる勉強の日々があった。中曽根内閣の官房長官を務めた故藤波孝生さんは中曽根さんを「生涯一書生」と呼んだ。その姿は終生変わることがなかった。

2007年2月11日の結婚記念日には次の句を詠んだ。「つつましく　老ゆる心に梅の花」。波乱に富んだ人生を経てようやく訪れた平安なのだろう。妻への労りに満ちている。蔦子夫人の死の際には「頼みあう　夫婦となりて　年のくれ」としたため、そっとお棺に入れたという。家庭を大切にした人だった。